

『アーサー・ラザフォード氏の遅すぎる初恋 DAILY LIFE in NY』

著：名倉和希

ill：逆月酒乱

♪ 時広

朝、目が覚めると、そこには大好きな人の寝顔がある。無防備に、手足を健やかに伸ばして、すうすうと寝息を立てている。

アーサーという名の時広の恋人だ。

栗色の柔らかそうな髪が乱れている。起きているときは、その高身長もあいまって周囲を睥睨するような目つきをするが、いまは閉じられているから優しい印象しかない。

枕元の目覚まし時計をちらりと見て、起床時間までまだ十分ほどの余裕があることを確認する。

(幸せだなあ)

時広はしみじみとそう思い、うっとりとしてアーサーの寝顔を眺めた。パジャマのボタンがひとつ外れていて、鎖骨が見えているのがセクシーだ。

こうしているとハワイでの楽しかったバカンスが思い出される。最初の五日間は友人カップルと行動をとともにし、オアフ島で観光地へ行ったり買い物をしたりしたが、その後、アーサーと時広はモロカイ島へ移動し、二人きりの時間をたっぷり過ごした。

波の音を遠くに聞きながらアーサーとくっついて昼寝をしたり、浜辺を散歩したり。夜は毎晩、愛しあった。時広はアーサーの体のすべてにキスをする、アーサーも時広の体のすべてにキスをしてくれた。愛の証しを体の奥に何度も注がれて、そのたびにアーサーにバスルームで洗われて、恥ずかしいのにその行為にも感じてしまって、からっぽになったそこにまたアーサーを埋めこんでもらいたくて——きりがなかった。

ハワイでのバカンスが終わったあとは、日本に立ち寄った。すでにお盆は過ぎていたが、時広は先祖代々の墓にお参りをしたかったからだ。八月下旬の東京はまだ暑くて、すこし外を歩いただけで汗が噴き出るような気候だった。けれどアーサーはひと言も文句を口にせず、黙って時広の墓参りに付き合ってくれた。

無人になっている時広の実家にちらっと寄り、友人カップルの大智とハリーと食事をしただけで、日本には長居せず、NYに帰ってきた。

JFK国際空港に降り立ち、タクシーでマンハッタンのミッドタウン・イースト地区に向かう途中、その車窓を眺めながら、時広は「ああ、帰ってきた」と思った。

日本とはちがう空の色。東京都心の高層ビル群とは、やはりデザインがちがうビルたち。道行

く車の種類はさまざまだし、通行人の人種もさまざまだ。NYに移り住んでから、まだ一年と四カ月。それなのにいつのまにか、もうここが自分の住む街だと思えるようになっていたのだ。

昨年の夏の北欧バカンスが穏やかではなかったのも、余計に今年の夏を楽しく感じたのかもしれない。

ピピピピ、と電子音が鳴り響き、時広はハッと我に返った。目覚まし時計に手を伸ばし、スイッチを切る。回想しながら十分間もアーサーの顔に見入っていたようだ。自分でもどうかと思うくらいにアーサーのことが好きなのだが、少し自制した方がいいのかもしれない。

(だって仕事に行きたくないって思っちゃうから……)

ため息をつき、触感が抜群にいい毛布に別れを告げてベッドから下りようとしたときだった。腕を掴まれ、ぐいっと後ろに引っ張られる。毛布に倒すようにされ、上から端正な顔が覗きこんできた。

「おはよう、トキ」

ついさっきまで熟睡していたとは思えないほどしっかり目を開いたアーサーが、笑いながらチュッと軽くキスをしてくる。その笑顔があまりにもピカピカと輝いて見えて、時広はいまさらキユンとしてしまった。

「おはよう、アーサー」

「君がいつキスしてくれるか待っていたのだが、なかなかしてくれないので私からしたよ」

「えっ、起きていたの？」

「君の熱い視線をあれだけ感じて起きないとしたら、それは私であって私ではないね」

よくわからない言い方をされてきょとんとした時広に、アーサーが笑みを浮かべながら覆い被さってくる。しっとり唇が重なった。ちゅうと唇を吸われたあと、上唇と下唇を交互に甘く噛まれ、背筋がじんと痺れてくる。

「はあ……」

うっとり甘ったるい息をついた。アーサーが首筋に顔を埋めてきて、同時に両手で脇腹を撫で上げられた。いつもの性感を高める触れ方に、時広は気持ちよくて目を閉じる。パジャマの上から指先で乳首をこりっと弄られた。

「んっ」

微弱な電流に似た快感が走り、時広はのけ反る。尻の奥が疼いたような気がした。

昨夜もセックスをした。その名残か、体のいたるところが敏感なままで、ささいな触れ合いだけで火が点きそうだ。流されそうになり、時広は慌てた。

「アーサー、もう起きる時間だから」

「まだ少しくらい大丈夫だろう」

「朝食の時間がなくなっちゃうからダメだよ。朝はきっちり食べないと」

「たまには抜いてもいい。絶食する健康法だってあるくらいだ」

「いやいや、それとこれとはちがうから。アーサー、ダメだったら」

パジャマのボタンがひとつ、ふたつと外されてしまう。そこから大きな手が滑りこんできて、

乳首を直に触った。もう尖ってしまっていたそれを指で転がすようにされ、時広は「ああん」と声を上げてのけ反る。

「ほら、君の体は正直だ。私を欲しがっている」

アーサーがくすくすと笑いながら時広の胸に吸いついてきた。尖った乳首を舐め回し、さらに時広を悶えさせる。

「あ、やだ、そんなにしないで、アーサーっ」

乳首は時広の弱点のひとつだ。すっかり性感帯として開発された胸の飾りは、ちょっと弄られただけで本体の意思を無視してさらなる愛撫を求めるようにツンと膨れる。そこを舐められたり吸われたり、さらに軽く歯を立てられたりしたら、もうたまらない。パジャマのズボンの中で、時広の分身がむくりと頭をもたげた。それに気づいたアーサーが、布地の上から揉むように触ってくる。

「あ、あっ、やめて、ねえ、アーサー、ダメだって。今日は出張だって言っていなかった？」

「君のここはすっかりその気だな」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>